

心の傷を抱えた子どもを支援する

レバノンの南部サイダ市にある「ファミリーガイダンスセンター (FGC)」は、児童精神科の専門機関です。そこでカウンセリングを行っているアラビさんはパレスチナ人。ベイルートのブルジバラジネ難民キャンプのそばで生まれ育ちました。高校生まではインテリア専門家を目指していましたが、友人の勧めで心理学を学びました。今は奨学金をもらってイタリアの大学の通信制で音楽セラピーを学んでいます。ファミリーガイダンスセンターでは心理専門家として、ソーシャルワーカーや精神科医から引き継がれた子どもの患者のサポートを行っています。



子どもたちが怖がらないよう白衣を着ないアラビさん。大きい体と優しい声が特徴的。

レバノンのパレスチナ人、またシリアから避難してきたシリア人とパレスチナ人は、深刻な問題を抱えています。特にアイネヘルウェ・キャンプを含むサイダ地域はベイルートに比べてメンタルな問題を抱えた人口が多いといわれています。というのも、アイネヘルウェでは20年近く武装勢力による衝突が続いているからです。さらに壁に囲まれたキャンプは、出入りにも制限がありレバノンの他のキャンプと比べて隔離されています。この安全が確保されない状況で社会的に排除され、経済状況が悪く働くこともできない環境下で、キャンプに住む人々は社会的な孤立を感じやすくなっています。極度な緊張や恐怖が継続するのに、信頼できる大人の支援がなく、慢性的に過度なストレスを抱えると、復元力が失われ心だけでなく身体に異常をきたし、十分な成長ができなくなります。

8歳の男の子のケース

アイネヘルウェに住む8歳の男の子は、武装勢力同士の衝突事件が起きた場所のすぐそばに住んでいました。衝突のトラウマが大きく、夜は寝ることができず、学校では授業に集中できないなど問題を抱えており、何事にも恐怖を感じている状態でした。私が初めて会ったときも、保護者の付き添いなしには話すこともできない状況でした。心理サポートをしながら、引越して子どもの環境を変えることを家族に提案しました。心理サポートに協力的であった家族はキャンプ内の衝突が少ないところに引越しました。日常的に恐怖を与えないために、保護者には喧嘩や言い合う姿を子どもの前ではみせないようアドバイスも行っています。週に1回の心理サポートを行ってから4か月、彼は笑顔を見せるようになり、一人でお使いに行くことができるようになりました。いままサポートを継続しています。

16歳のシリア人女の子のケース

シリアで父親を病気で亡くした16歳の少女。母親と姉と弟でレバノンの叔母を頼って逃れてきました。リベラルな家庭で育った彼女には、宗教に厳格な叔母の家庭が合わず苦勞しています。叔母との関係を心配した母親が、娘をFGCに連れてきました。数回のカウンセリングを通して彼女はうつ状態と診断されました。実は母親は末期がんを患っていて、余命数か月といわれています。しかも姉はドイツに逃れたシリア人と結婚する予定で、書類が揃えばすぐにもレバノンを出国予定です。

彼女自身も過去に大きな問題を抱えています。少女はシリアからトルコを通って欧州へ難民として避難しようとしたが、途中で逮捕され2か月ほど拘束された経験をしています。この間に暴力を振るわれたのではないかと私たちは推測しています。父に続いて母と姉をも失おうとしている中で、レバノンでの新生活に苦勞している彼女に少しでも力をつけて、将来に向けて生きる意志をもってもらうと演劇活動への参加を促しています。

5歳のシリア人男の子のケース

アイネヘルウェに在住。暴力や暴言がひどく幼稚園で対応できないとFGCへ紹介されてきました。最初のカウンセリング時に男の子は母親に抱かれたままで私と目を合わせようとせず、そのあと、私に噛み付き叩いてきました。レバノンに来る半年前にシリアで、この子を含む親族の目の前で叔父たちが殺害されたのです。一家は検問所を通らず、シリアとレバノン国境の山を徒歩で逃れてきました。この経験がトラウマとなって、家族以外を脅威とみなしていたのです。すべての大人は自分を殺害しようとしていると思い、自分を守るために周囲に暴力をふるっていました。母親と一緒にカウンセリングを複数回実施して、暴力に頼るのではなくこの子が感情を表現できるようにサポートしました。近所の人に風船を渡してお礼を言われるなど、実際に周囲の大人のやさしさに触れる機会を作り、ソーシャルワーカーとともに彼の恐怖を取り除く工夫をしました。その結果、小学校にも通えるようになりました。ドイツへの難民申請が受理され、家族は今ドイツで生活を送っています。

アラビさんは、できるだけ早い時期の介入と保護者サポートの重要性を強調します。

「子どもは2、3歳になると、母親からも少しずつ独立して兄弟など他の家族との関係性ができ始めるころです。発達障害がいもこの時期からサポートすると症状を軽減することができます。親が心理的問題を抱えていても子どもに影響を与えないように改善することができますし、効果が出やすいのもこの時期です。

私はパレスチナ人として育ったことで、問題の背景やキャンプの状況もわかるのでそれを活かして、少しでも多くの心理サポートが必要な子どもたちと関わっていきたくと思っています。」